



パステルラボ  
伊藤 数子 社長

いとう・かずこ 新潟大学工学部卒。現在、総務省情報通信審議会専門委員、いしかわ女性基金運営委員、金沢商工会議所評議員などを兼務。好きな言葉は「チャレンジ」。小物などを使い、人をピックリさせるイタズラが大好きで「社員は皆、被害者かも」と笑う。新潟県佐渡市生まれ。

受託業務中心を改め、自らが企画提案した商品・サービスを提供すること。「いつもやりたいことはオリジナルナリティー。我々にしか出来ない商品・サービスを世の中に送り出していきたい」と言う。その一つが、障害者や高齢者からの電話応対力を向上させる「イーパス テル」の開発。オペレーターの教

障害者・高齢者にやさしい

## 電話応対力向上ソフトを自社開発

「会社は自分の夢を叶えるステージだ」と、新入社員にいつも訓示する伊藤社長。大學を卒業して、CMなどの映像制作会社に就職。その時、「映像を創るより、売れる方法があるのになあ」と思いながらも、自社の売上げにならないので提案できなかつたサラリーマンの性を経験。「私ならこうするのに。商品・サービスを考える段階から、早く私を仲間に入れて」という思いが募り、1991年、28歳の時に同社を設立した。

99年には東京オフィス（渋谷区）を開設。出向先の金沢で知り合い、東京の本省や本社に戻った人々と交流を深めるの役立つている。「地方に本社を置くことは、田舎や自然も含めた広い視野で物事を見ることができ、バランスよく企画やアイデアが出せる。目標とする“地に足をつけた仕事をする”のに最適な環境」と言い切る。

今後の課題は、これまでの受託業務中心を改め、自らが企画提案した商品・サービスを提供すること。「いつもやりたいことはオリジナルナリティー。我々にしか出来ない商品・サービスを世の中に送り出していきたい」と言う。その一つが、障害者や高齢者からの電話応対力を向上させる「イーパス テル」の開発。オペレーターの教

行政機関・企業におけるコンサルティングをはじめ、プロモーションの総合企画・マルチメディア「ハーテンツ」の開発など、人づくりからものづくりまでトータルにブランディングするパステルラボ（金沢市西都）。総務省をはじめ、国の出先機関、県・市町、大学などから高い信頼を得て、市場調査や広報誌づくり、セミナー企画などの受託業務を主に事業を展開する。女性起業家として脚光を浴びる伊藤数子社長を訪ねた。

『会社は自分の夢を叶えるステージだ』と、新入社員にいつも訓示する伊藤社長。大學を卒業して、CMなどの映像制作会社に就職。その時、「映像を創るより、売れる方法があるのになあ」と思いながらも、自社の売上げにならないので提案できなかつたサラリーマンの性を経験。「私ならこうするのに。商品・サービスを考える段階から、早く私を仲間に入れて」という思いが募り、1991年、28歳の時に同社を設立した。

育に最適であるといひ、このほど、総務省の地デジ「ホールセンター」に採用された。

さらに、10月には有料職業紹介業の免許を取得。NPO法人 STAND（スタンド）の副代表理事として、障害者スポーツの振興に携わってきた。「障害者も健常者と同じように、スポーツ用具の購入や交通費などが必要であり、働きたい方がたくさんいる。その職業紹介にも努めたい」と語り、スポーツをする障害者は挨拶をはじめ、人とのコミュニケーションにも優れ、一般企業でも充分に戦力になると評価する。

## 夢をあきらめない

また、障害者スポーツの全国大会の一つである「第15回日本電動車椅子サッカー選手権大会」が24、25の両日、金沢市のいしかわ総合スポーツセンターで開催される。そのインターネット生中継に対して、地元企業に協賛をお願いしたところ、きんしんなどが快く承諾してくれた、と感謝の言葉を述べる。先日、女性起業家のフォーラムでパネラーを務めた時に、「なかなかうまくいかない。どういう段階で、あきらめたらいいのか」との質問を受けた。そこで、「私はあきらめぬ」という言葉はない。やめることを、まったく考えない。やめることを、まったく考えたことがない」と答えるながら、自身も初めてそのことに気付いた、という「企業は何十年、何百年と継続していく。その期間は、ずっと、うまくいくわけではない。皆、大変な時期はある。しかし、やめてさえいなければ、そのことはただの歴史のひとりよみに過ぎない」と、自らを顧みて、起業家にエールを贈る。